



ギリシャ神話に登場するヘラは、結婚と家庭をつかさどる女神。英名をジュノーといい、これが英語の「6月」の語源にもなった。「6月の花嫁（ジュノン・ブライド）は幸せになれる」という言い伝えは、元をたどれば結婚の神であり6月の守り神でもあるこの女神の存在からきている。

ジュノー像

東京の私のブライダルハウスには、このジュノー像の彫刻が2体飾つてある。1体は私のオフィスのベランダに、もう1体はエントランスの吹き抜けの壁に。この女神像を見ると不思議な安心感に包まれる。同時に、苦学したパリの留学時代を思い出す。

私がかつてパリの地に降り立ったのは、共立女子大卒業後の1960年。中学時代から夢見てきた演劇の道をあきらめ、ファッションの世界に進もうと、オートクチュールの技術を教える学校に留学した。今でこそパリにいれば欧米の好きなところに足を運べると思われるが、当時はそれどころではなかった。

苦学のパリ、女神の祝福

かつら・ゆみ 東京生まれ。ブライダルファッションデザイナーの日本の先駆。1999年東洋人デザイナー初のイタリアファッション協会正会員に。毎年パリオートクチュールコレクションにも参加。国内外に多くのファンを持つ。

1^下が360円の時代。為替手数料を入れたら実質は400円ぐらいだったと思う。洋裁学校を経営していた母にとっても、そのレートで渡航費と年間の授業料や生活費を出すのは並大抵なことではなかったはず。だが、私はどうしても本物の洋装文化に触れ、

でパリを離れられなかった。南仏にさえ、足を運べなかった。

その私が日本への帰国の途上、ただ1カ所だけ立ち寄ったのがギリシャだった。服装史を学ぶ上で欠かせない国だが、ロマンチックなものが大好きな私にとって、ギリシャは神話と歴史に彩られたロマンの都だった。パルテノン神殿を初めて見たとき、留学の苦勞がいつぱんに晴れたのを今でもはっきり覚えている。

ジュノン・ブライドのシンボリックな女神像



手を差し伸べて静かにほほえみ、花嫁たちを見守るジュノー像。ブライダルハウスを建てる時に作ったこの女神像には、ロマンチックなウエディングドレスで日本の花嫁の夢を叶えたいという、私の原点ともいえる若きころの思いがまつまっている。